「古代史の焦点」出版記念講演会2022年6月19日inアネックスパル法円坂正木裕

「邪馬壹国」の官名

俾弥呼は漢字を用いていた

一大夫・泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚の真実一

(たいふ) (せもこ) (へきょこ) (じまこ)



爵(しゃく)

爵(散開饕餐紋)晚商三期高19.2cm流尾長15.7cm奈良国立博物館蔵



觚 (こ)

觚(散開饕餮文)商(殷) 時代高32.7㎝口径15.6 ㎝奈良国立博物館蔵



卣(ゆう)と勺(しゃく)

召卣と素勺。西周早期。故 宮博物院収蔵(台北ナビ)



兕觥 (じこう)

象文兕觥(ぞうもんじこう) 商後期。高22.3㎝重量 1.83㎏。泉屋博古館蔵

近年の考古学や科学分析で一層確実となった「博多湾岸邪馬壹国説」

俾弥呼の時代に、全国でもっとも都市化が進んだ地域は、JR博多駅南の比恵・那珂遺跡地域

2018年12月に大阪歴史博物館で開催された「古墳時代における都市化の実証的比較研究 - 大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地 (纏向・南郷等) - 」総括シンポジウムで、「<mark>俾弥呼の時代に、全国でもっとも都市化が進んだ地域は、JR博多駅南の比恵・那珂遺跡地域</mark>で、他にはなく、『初期ヤマト政権の宮都』とされる纏向遺跡では、そのような状況は依然ほとんど不明」 (福岡市埋蔵文化財課人住猛雄氏) とされた。

新基準のC14測定で箸墓は、AD300 年頃~4 世紀前半

2020年8月に採用された炭素年代値の較正曲線 (INTCAL20) を用いたC14測定で、以前の較正曲線で3世紀俾弥呼の時代とされていた著墓は、AD300 年頃~4 世紀前半の可能性が最も高くなった。

大和の発掘・調査に携わってきた考古学者が「畿内ではありえぬ邪馬台国」を上梓

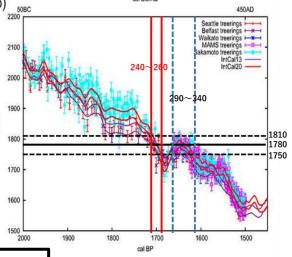
2020年9月に、橿原考古学研究所で、長年纒向遺跡をはじめ、多くの大和地域の発掘・調査に携わってきた関川尚功氏が「考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国」 (梓書院)を出版。「邪馬台国の存在を大和地域に認めることは出来ない」との結論を出した。

博多湾岸の遺跡で半島との交易を示す石権(石重り)が発見される

2021年に須玖遺跡群で、11gを基準にする弥生中期前半〜後期の10進法の石権(石重り)が発見された。この権は韓国・慶尚南道の茶戸里(タホリ)遺跡の権と同じ基準で、『倭人伝』に「船に乗り、南北に市糴す・市有りて、有無を交易す」と記すことを裏付ける。<mark>畿内の石権亀井遺跡の基準値は8.7gで2・4・8・16・32倍の「8進法」の権だった</mark>。これで半島と交易していたのがヤマトでなく筑紫だったことが確定。

比恵・那珂遺跡群全体図







須玖遺跡群で発見をれた石権

「筑紫」で次々発見される「文字外交」を証する遺物

21世紀に入り北部九州から文字外交を示す硯の発見が相次いでいる

2016年~2020年に、柳田康雄国学院大客員教授らにより、『魏志倭人伝』に記す<mark>「文書外交」に</mark> 必要な墨痕の残る硯が、俾弥呼の時代を含め、北部九州・博多湾岸等から次々発見された。



123

弥生~古墳前期の硯・研石出土数

紫とその周辺から出土し

ているのです。

筑前町薬師ノ上遺蹟出土の弥生の硯

「硯の発見」は邪馬壹国の中心が博多湾岸にあったことを示す

『倭人伝』:「文書・賜遣の物を伝送して女王にいたらしむ」⇒筆記具が必須

柳田康雄国学院大客員教授らが2016年に三雲・井原で硯を発見、その後福岡で 硯の発見が相次ぐ。しかも使用された痕跡があり発見地は福岡県全域に広がっている。

筑前町薬師ノ上遺蹟出土の弥生の硯(弥生後期初頭~前半、AD1世紀ごろ。これは「志賀島の金印」が下賜された時代)には、使用された事を示す墨の痕跡が残っていた。また、2017年に比恵遺跡から出土した硯は、遺跡の年代から3世紀のものとされており、俾弥呼・壹與の時代と一致する。⇒筑紫では弥生~古墳初期に文字使用が一般化し、俾弥呼は「漢字外交」を行っていた。



筑前市 北九州市 海島市 糸紫進出 域の広 みてい 朝倉市 春日市 小郡市

福岡県

石川県 島根県

長崎県

岡山県

奈良県

佐賀県 大阪府

鳥取県

13

11

10

熊本県 広島県 朝日新聞2017年11月19日: 柳 大分県 田康夫國學院大客員教授提供 兵庫県 筑紫野市 筑前市 北九州市 福岡市 糸島市 『倭人伝』に記す「文字) 築城町 外交」を示す硯の圧倒 筑後市 的多数は北部九州・筑

2020年に柳田教授により、福岡県行橋市の下稗田遺跡で、<mark>紀元前2世紀</mark>(弥生時代中期前半ごろ)とする硯も発見された。そうであれば「天孫降臨時期」(海人族の筑紫進出時期)と一致。また福岡全域で出土していることは7万戸とされる邪馬壹国の領域の広がりを示すものといえる。*「同時期の硯は福岡、佐賀県の玄界灘沿岸に多数あるとみている」(西日本新聞2020年10月10日、柳田)

中国史書から倭人の漢字圏との交流は紀元前10世紀に遡ることが分かる

(漢字圏との交流) 倭人は周王朝と交流し「鬯草」を献じた

周王朝とは紀元前11~前10世紀頃武王により「殷(商)王朝前17世紀~前11世紀」を倒し創建。前771年の鎬京から洛邑遷都までの「西周」、以後前255年秦に滅ぼされるまでの「東周(春秋戦国時代)」の間の約800年間続いた王朝。<mark>倭人は周王朝の成立期から朝貢し交流していた。</mark>*周の成立:前1055~1021 (中国百科事典) 前1116~1079 (中国歴史年表) 等諸説。

「倭人」の読みー「倭・委」の上古音は「ゐ」

「委奴国」の「委」は「ゐ」で、しなやか・穏やか・従順な意味。「倭」はこれに「人偏」が付いて「穏やか・従順な人」のことを表し、上古音は「わ」でなく「ゐ」。「委奴国」の「奴」の読みは「ど・ぬ・の」。偏は「女」、旁の「又」は手の象形で、併せれば「捉えられた女」を表す蔑称



周代・漢代の倭人朝貢が『論衡』・『後漢書』に書かれていた

1、『論衡 (3んご)』(著者「王充」27~91)に前11~10世紀に「倭人が周王朝へ朝貢した」と記す。
①「周の時、天下太平にして、倭人来たりて鬯草を献ず」(異虚篇)②「成王の時、越裳雉を献じ、倭人鬯(草)を貢ず」(恢国篇) ③「周の時天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬯草を貢す。白雉を食し鬯草を服するも、凶を除くあたわず」(儒増篇) *成王は周王朝第2代の王(武王の子)







2、王充の存命時の建武中元二年(57)に、「倭人」が漢の 光武帝から「金印」を授かった。 (福岡「<mark>志賀島の金印</mark>」⇒<mark>北九州の倭</mark> 人) *『後漢書』(著者「范曄 (はんよう)、398~445)倭伝「建武中元二年 (57)、倭奴(ゐぬ)国、奉貢朝賀す。使人自6大夫と称す。</mark>倭国の南界を 極むる也、光武、賜うに印綬を以てす」(漢委奴国王)

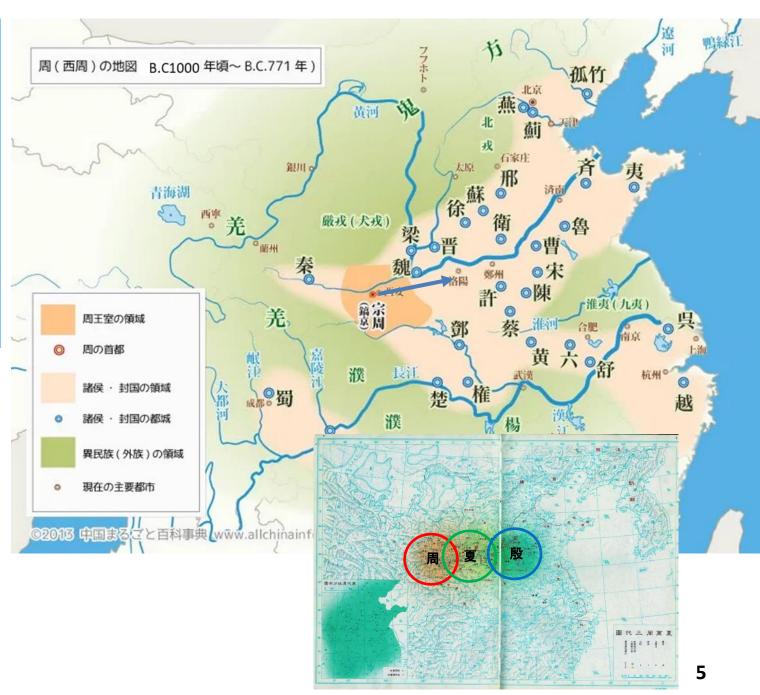
王充が認識している 倭人は**北九州の倭人** なんです。金印の読み は知っているはず。

国委**冼** 王奴**庆**









(漢字圏との交流) 「歳事を以て来り献見」していた倭人

『漢書』の倭人朝貢

「歳時を以て来り」⇒「周代以来漢に至るまで定期的に朝貢」

1、『漢書』にも「倭人の定期的朝貢」が記され、著者班固 (32~92) も57年 の倭人朝貢を現認していた。
◆ 『漢書』「夫れ楽浪海中倭人有り。分れて百余 国を為す。 歳事を以て来り献見すと云ふ」 『漢書』 地理誌序文「是を以て旧聞を采獲し、詩、書を考迹 (しゃく・考え辿る) し、山川を推表し、以て<u>禹貢、周官、春秋</u>を綴ね、下は戦国、秦、漢に及ぶ」 班固は周代の事を十分研究し倭人について記したと誇る。* 禹貢は『書経』の一篇で地理書、周官は周礼のことで「礼」を書す、春秋は孔子が編纂したという中国春秋時代の史書



班固は、「いろいろ調べると 楽浪海(朝鮮半島周辺 の海)の倭人は周代から 季節ごと(年ごと) に朝貢し てきていた」と言っています。 倭人はずっと漢字圏と交流 していたんですね。

倭人への金印授与は王充・班固の時代

2、「倭人」への金印授与は『論衡』の著者「王充 (27~91)」『漢書』の著者班固 (32~ 92) の時代にあたる。 <u>王充と班固はともに「倭人」の朝貢を現認している。従って王充・班固が倭人と書くとき、それは</u> 金印を授かった「北九州の倭人」をいう。 ⇒倭人の朝貢記事はこれだけではなかった

『礼記』『周礼』に「倭人が周公の墓前に昧(マイ)と聲歌を奉納した」と記す

漢字は舞の形を表している

『礼記』では、周の成王は周公(*周公は幼い成王に代わり政務を司った建国の功労者)の弔いのため、東夷の楽「昧」を大廟に奉納したとある。◆『礼記』明堂位「味(まい=舞)、東夷の樂なり。任、南蠻の樂なり。夷蠻の樂を大廟に納む」◆『周礼』疏「鞮鞻氏、四夷の樂と其の聲歌を掌る。(略)東夷の樂を靺

(味・まい)と曰ひ、南方、任と曰ひ、西方、侏離(しゅり)と曰ひ、北方、禁と曰ふ」

⇒『論衡』 と『礼記』 を対照すれば「南蠻の越裳が白雉を献上し任を奉納した。 東夷の倭人が 鬯草を献上し昧 = 舞を奉納した」こととなる。 我が国の舞踊は今でも「マイ = 舞」と呼ばれる。 巫女舞



(象形文字)「舞」

(漢字圏との交流) 倭人は何故紀元前10世紀に周王朝に朝貢したのか

殷を滅ぼした武王は、箕子を朝鮮に封じた

◆『論衡』玄菟楽浪。武帝の時、置く。皆朝鮮・穢貉(ゑが、ゎぃば)・句麗の蛮夷。 殷の道衰え、箕子去りて朝鮮に之く。其の民に教うるに礼義を以てし、田蚕織作せしむ。
⇒<mark>倭人は箕子を仲介として中国の天子に服属し水田耕作や絹織物の技術を教わった。</mark>*田は水稲栽培を意味し、水田耕作が北部九州に広がった(弥生時代の始まり)のは前10~前7世紀頃に遡るとの最新の考古学の知見とも一致。蚕織作は桑を育て蚕を飼育し布を織ること。





「周」の官制を用いていた倭奴国(「大夫」の称号は「周」まで)

『後漢書』に「(倭奴国の)使人自ら大夫と称す」とある。『倭人伝』にも「大夫難升米 (はしょうまい)・大夫伊声耆(いしょうぎ)」とある。この「卵、大夫、士」という三分法は、夏、殷、周に用いられたと言われるが、周を以て断絶する。これは、漢・魏朝に朝貢してきた倭奴国、邪馬壹国は「周」の官制を用いていたことを示す。

殷・周代は青銅の祭器の全盛期だった

最も尊重された「鼎」

殷・周代、特に殷代は神事と政治が一体であり、その際用いられる青銅の器が王朝の神器・宝器となった。 <mark>殷・周王朝で最も尊重され、王権の象徴となったのが「鼎(てい・かなえ)だった。</mark>夏王朝の始祖 禹王が九州(国内九地域=禹貢(うこう)九州)から貢がせた青銅で「九鼎」を鋳造したという。「九鼎」は、殷・ 周王朝に引き継がれ、朝の最も尊重する宝器となった。秦はこれを得ようとしたが、失われたため新た に「玉璽」を王権の象徴とした。*『史記』などによれば、周の成王即位の折、周公旦は九鼎を雒邑(洛陽) に移し、ここを新都と定めたという。「奠都(新たに都を定めること)」を「**鼎を定む」**というのはこの故事に由来する。

鼎:殷時代末BC13 ~11上海博物館



(祭器と漢字) 周は青銅器の「爵」を身分のシンボルとした

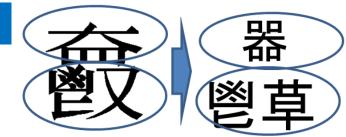
「爵」は酒を「注ぐため」の青銅の器で「身分のシンボル」となった

「爵」は、殷・周代に盛行した三本足の青銅酒器。古くは位階授与とともに「爵」を授けたり、「爵」を用い酒を賜うたことにちなみ、「爵」を人物の徳(天爵)や身分(人爵)を指す概念として用いた。これを<mark>「爵制」</mark>という。⇒公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵等はこれに由来する。

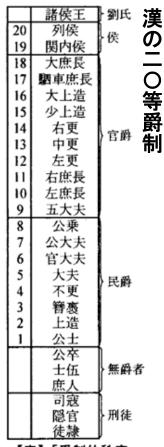
* 王維の詩「従弟蕃の淮南に游ぶを送る」に、「帰り来たりて天子にまみえ 爵を拝して黄金を賜う」(拝爵 * ねぎらいの盃を受けること)とある。

周の「五等爵制」 周公は青銅の祭器「爵」に由来する「周爵制」すなわち公・ 侯・伯・子・男からなるいわゆる五等爵制をつくり、爵位に応じて采邑や秩禄を 賜与したとされる。*夏が五等爵、殷が三等爵、周が再び五等爵とされるが、後年漢代の 20等爵のような厳密な位階制ではなかった可能性が高い

倭人の鬯草貢納は漢字の「爵」と密接に関連



倭人が朝貢した周代は、青銅器「爵」に基づく 「周爵制」の時代。そして倭人の献上した「鬯 草」と「爵」の儀礼は不可分だった。



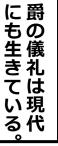
【表】「爵制的秩序」



爵:殷時代BC13~12 中国社会科学院考古研 究所蔵H37.3cm



乳釘紋銅爵 殷·周時 代河南省洛陽博物館





(祭器と漢字) 「觚 ⑴ 」は爵と対をなす「酒を飲むため」の青銅の器

豆:東周(春

BC6奈良国

秋戦国)

『周禮』に記す「爵と觚」の儀礼

「觚」は青銅のコップ(盃)

少し大きな墓では、こうした爵と觚が五組とか十組を一つ のセットとして副葬される例がある。(奈良国立博物館)

「觚」は爵と対をなして儀式に用いられた青銅器の盃。爵は注ぐ器、觚は受ける 器。「祭器」であるから注ぎ方飲み方にも「礼」(ルール)があった。

◆『周禮』(冬官考工記梓人) <u>爵一升、觚(こ)三升。献ずるに爵を以てし、酬(こ</u> た) うるに觚を以てす。一獻に三酬、則ち一豆なり。(*「升」は、容量の単位ではなく [ます] 、すなわち1杯の意味。「豆」は神に奉げる供物を載せる高槻)

<u> 爵</u> (しゃく) **、一升、** ⇒爵1杯が

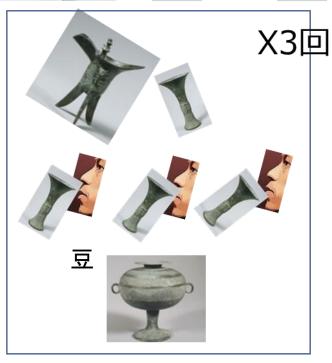
觚 (ਣ) 三升。 **⇒觚3杯にあたり(3獻)**

献ずるに爵を以てし、 ⇒爵で注いで

立博物館 酬 (こた) うるに觚を以てす。⇒觚で飲む。 一献 (いっこん) に三酬、 ⇒1献で3度(3口)飲む(3酬) ⇒1度「豆」の上の菜を食す(1豆) 則ち一豆 (とう) **なり。** 3献×3酬=9度で菜は3度食す。これが「三献の儀」すなわち「三々九度」 と、「干し鮑・栗・昆布をのせた三宝」の起源と考えられる。







わが国に残る「爵と觚の儀礼=三々九度・三献の儀」

日本の正式な酒宴の作法儀礼。 肴の膳を出し酒を三度すすめる (飲む) ことを一献と数 三献の儀(式三献) え、初献・二献・三献と膳を替えて三回繰り返す。平安時代から見られ、室町時代に「式三献」の語が用いられた。* 天皇が仁寿殿の南面東廂に出御して三献を行う記事が大同4年(809年:『類聚国史』)、弘仁3年(812年:『年中行事秘抄』)に見られる。

現代の「三三九度」と「三献の儀(式三献)」

◆現代の三三九度 婚礼時の固めの盃。 正式には 一の盃(小) 新郎→新婦→新郎、 二の盃(中) 新婦→新郎→新婦、 三の盃(大) 新郎→新婦→新郎 とする。(新婦三口→新郎三口→ 新婦三口合計九度などの簡略形あり)。 古代中国の陰陽に由来する 儀式で、陽の数である三や九が用いられたといわれる。













◆『鎌倉年中行事』(足利氏に仕えた海老名季高著の 武家故実書。1454~1456)に、出陣時は、

①「打ち鮑・勝ち栗・昆布」を乗せた三方(宝)を前に置き、②打ち鮑を口に入れ、長柄役が注いだ一献目を三度に分け飲む。③勝ち栗を口に入れ、二献目を三度に分けて飲む。④昆布を口に入れ、三献目を三度に分けて飲む。と記す。*打ち出でて、勝って、喜ぶ。凱旋時は勝ち栗⇒打ち鮑⇒昆布の順、勝ってうち帰り喜ぶ。

(祭器と漢字)『魏志倭人伝』の官名「觚」と周の青銅器「觚」

青銅器の特異な「觚」の文字が『倭人伝』の伊都国・奴国の官名「泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚」に用いられている

『倭人伝』東南陸行五百里、伊都国に至る。官を爾支(にき)と日い、副を<mark>泄謨觚(せもこ)・柄渠觚(へきょこ)と日う。 千余戸有り。世王有るも皆女王国に統属す。郡の使の往来して常に駐る所なり。東南奴国に至ること百里。官を 児馬觚(じまこ)と日い、副を卑奴母離と日う。二萬余戸有り。(*官名の読みは仮に古田武彦氏に「準拠」する)</mark>

これらの官名の読みについて

古田武彦氏:泄謨觚(せもこ)・柄渠觚(へくこ)兕馬觚(じまこ)

◆古田武彦氏は『邪馬一国への道標』では泄謨觚(せもこ)・柄渠觚(へくこ)『失われた九州王朝』では兕馬觚(じまこ)と読んでいる。漢王朝や、陳寿ら魏・西晋朝の人々の発音は、彼らが北方民族の侵攻で南方に追われたため、「日本呉音」に残るとされ、そうであれば「泄謨觚(せもく)・柄渠觚(ひょごく)・兕馬觚(じめく)となるが、周代の発音は全く不明。そこで、ここでは漢字の偏・旁の我が国一般的な読み「世せ・莫も・瓜こ」「丙へい・巨きよ・瓜こ」をもとにし、「馬」は「邪馬」を「やま」と読むのと整合するよう「せもこ・へきょこ・じまこ」と「仮に」読んでおく。

てんな漢字独自に思いつく く筈はありません。その元は周王朝の制度・器物の 漢字であり、周代以来の 漢字圏との交流の成果 (遺産)」と考えらわます。

『魏志倭人伝』の他の官名と異質な泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚

『倭人伝』の対海国・一大国の大官「卑狗 (ひく・ひこ) 」副官の「卑奴母離 (ひぬもり) 」、不彌国の「多模 (たも) 」、投馬国の官「彌彌 (みみ) 」副の「彌彌那利 (みみなり) 」等は「倭人発音」に漢字1字を充てたと理解できるが、この3つの官名は①発音を充てる文字としては特殊で簡単には読めない。②『三国志』はもとより中国史書に例がない単語。③官名の意味が不明。③『倭人伝』でク・コ音は「狗」(卑狗・狗古智卑狗)と記す中で「觚」は特異な表記。その中で「觚」は『周禮』ほかで「青銅の酒器(盃・コップ)」を表しており、古代中国では字も意味もよく知られていた。また周代の官位制「爵制」の「爵」も青銅器の酒器に由来する。



黃觚。西周後期、 上海博物館館藏。

(祭器と漢字)『魏志倭人伝』の官名「觚」と周の青銅器「觚」

泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚は周爵制に倣う「觚制官位」

「爵」と関連する「鬯草」を献上した倭人は、「爵と觚」の儀礼を知っていた。また、倭奴国・邪馬壹国の使者は、周の位階である「大夫」を名乗っており、倭人はこれら儀礼や周爵制を「理解し取り入れ」ていたのであり、当然「その官名の読み」を知っていた。ことになる。*倭王も「爵」を授かった(封爵)可能性も高く、倭人はますます「爵」と一体の「觚」の重要性を認識したはず。そこから、<u>泄謨觚・柄渠</u>觚・兕馬觚の官名は、「爵」と対を成す周の青銅の祭器「觚」に由来し、周の「爵」にもとづく位階制「爵制」に対応する、「倭人」の「觚制」に基づき、「様々な形状の觚の漢字名称」を官名につけ、その読みは周代の読みを引き継ぐものだったと考えられる。ちなみに、唐代においても冠位とともに觚などの青銅の「古器」が与えられた記事がある。

「官位授与」と並行した「賜觚」

唐代でも官位と共に「觚」等の青銅の「古器」が与えられた。

『旧唐書』に官位を与えるとともに「觚」を与える記事がある。

- ◆『旧唐書』列伝、第122「牛僧孺」。開成四年(839)八月。檢校 (*仮官) 司空、兼て平章事、襄州刺史、山南東道節度使に復し、食邑三千戸に至るを加える。<mark>辭する日に、觚、散、樽、杓等金銀古器を賜ひ、</mark>中使をして喻しめて曰く、「卿の正人 (行いの正しい人) なるを以て、此の古器を賜う。卿、ひとまず留まれ。」とのたまふ。僧孺奏して曰く、「漢南水旱の後、流民が待理 (「待理不理」放置されていること) されており、淹留 (えんりゅう。とどまること) よろしからず。」再三請ひて行く。
- * 牛僧孺 (ぎゅう そうじゅ、779~847) は、「牛派」を率い、李徳裕率いる「李派」との牛李の党争 (ぎゅうりのとうそう) で有名な中国の9世紀、唐代末の政治家。政変のつど宰相になったり、地方に左遷されたりを繰り返した。 開成四年記事は牛僧孺が司空に任ぜられ (事実上襄州刺史に左遷) るとき「觚、散、樽、杓等金銀古器」を賜り慰留されたが、水害で難儀する流民が放置されているとして断ったという記事。「中使」は勅使であるから、官位を授けるとともに、これら青銅器が与えられたことを示すもの。「古器」とあるのは、これは古代からの風習であることを意味すると思われる。







觚、散、樽、杓



(祭器と漢字)「泄セ謨モー觚コ」とは何か一広口の杯「觚」の名称

「泄セ謨ゼ觚コ」は広口の杯「觚」の形状を示している

「觚」は爵とセットで用いられた祭祀用の飲酒器

「觚」は商(殷)代前期に出現したが、そのうちに爵と必ずセットを成すようになり、商代後期に最も盛行した。下半分は上げ底で、外反した部分が足(圏足)である。上方に向かってラッパ形の口が大きく開く。(国立奈良博物館hp)

漢字の意味

「泄謨觚」は「広い飲み口から酒が漏れあふれ出る形状の盃」と考えられる

<mark>【泄】</mark>セチ(呉)セツ(漢)。世はセ(呉)セイ(漢) (水が)緩やかに外へもれ、流れ出る様を表す。 <mark>【謨】</mark>モ(呉)ボ(漢)。「**莫 (モ)** 」と通じる。 偏の「言」は口を開けるさま。旁の「莫」は「広く大きい」 意味で古くは「漠 (バク・広〈果てしない) 」と同じ⇒<mark>「謨」は「広く大きく口を開ける」器の名称。</mark>

- ◆『周礼』鄭司農(鄭衆)云、脩・謨・概・散、皆器の名。
- <mark>⇒「泄謨觚」は「広く大きい口(謨)から酒が漏れ溢れ出る(泄)杯(觚)」という意味。</mark> これは写真のような形状の「觚」を表すに相応しい器の名称と言える。
- *大変飲みにくくわざわざ零れ落ちるように作られ、「儀礼」目的の要素が強い。



觚:商(殷)~西周時代H25.1cm、口径14.7奈良国立博物館005612

- ・『三国志』元后(郭皇后・当時夫人)曰く、「宜しく皇后(毛皇后)を延(まね)くべし」。帝(魏の明帝)許さず。乃ち左右に禁じ、宣ること得しめず。后、之を知る。明日、帝、后にまみえる。后、曰く、「昨日北園の游宴、樂しからむや?」。帝、左右の之を泄す所を以て、十餘人を殺す。(毛皇后にも賜死)
- 『書紀』謀泄 (はかりこともる)
- ⇒泄は「水」だけではなく、口から溢れ出る、漏れ出る意味も持つ



実用的なコップ「觶 (し)」と觚は全然違う (奈良国立博物館蔵)



饕餮紋觚(とうてつもん こ)殷・周時代BC13〜 11青銅製H29.7㎝、 口径16.9㎝上海博物 館蔵 13

(祭器と漢字)「柄ヘ渠キョ觚コ」とは何かー北斗七星を象る柄付きの盃=勺・杓

<mark>【柄】</mark>ヒョウ(呉)へイ(漢)。(臼本「エ」)意味は、手で持つために、器物につけた細長い部分。「柄」 【渠】ゴ(呉)キョ(漢)。意味は、溝・頭

⇒「柄渠觚」は「柄」の頭の溝「渠」の部分で酒を汲む「柄付きの頭を持つ杯(觚)」即ち青銅器の「勺 (じゃく) 」を表すに相応しい。これは北斗七星を象ったもの



饕餮紋勺 (とうてつもんしゃく) 西周時代全長37.2cm・口径5cm・重量750g陝西省扶風県法門郷荘白村出土(1976年)宝鶏市周原博物館蔵 勺とは酒を飲む時、「卣 (ゆう)」や「尊」という酒器から酒を汲んだもの。酒を汲む部分は円筒形 (觚にあたる) で、

柄は弓形で、柄の先に双鳥双夔、柄の中程には饕餮紋を飾り、根元には獣面を配している

故宮博物院「素勺」



「勺・杓」は周王朝の尊んだ北斗七星を象った祭器

*七星の尾が「子」を指す月を正月(11月)とする「周正」を採用した。中国で北斗七星の柄を「杓(シャク)」、頭部 (渠)を「魁ヵィ・カシラ」という。柄は杓と、渠と魁は共に「カシラ」で同じ意味。(<mark>柄杓</mark>ひしゃく、**渠魁** きょかい。) * 《淮南子·天文训》(高诱注) 「"斗第一星至第四為魁、第五至第七為杓。"故魁杓亦指北斗七星」。



見卣(けんゆう)西周前期。 高37.2㎝重量8.78kg。泉 屋博古館蔵



(故宮博物院収蔵大東 文化大学吉田篤志写)

青銅卣・勺 (せいどうゆう・しゃく) 西周時代青銅卣・勺 山西省曲沃県曲村出土 (卣) 高30.7cm、口径 17.0cm、(勺) 長20.4cm、勺径2.5cm北京大学 サックラー考古芸術博物館蔵

婦好斗(殷時代後期·河南省安陽市殷墟婦好墓出土)長63.6cm、口径6.5cm、重2kg





饕餮紋

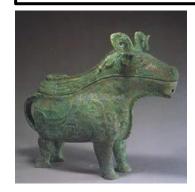
壶尊:殷時代BC13 ~11上海博物館



14

(祭器と漢字)「兕ジ馬マ觚コ」とは何かー兕馬の形をした觚=兕觥 (シコウ)

【兕】ジ(呉)シ(漢)は「山海経」に記す想像上の動物。犀や馬に似た一角獣。 <mark>【馬)</mark>メ(呉)バ(漢) (日本「ウマ・マ」)「 兕馬の形をした蓋付きの青銅器の杯」を <mark>「兕觥(じこ</mark> <mark>う)」</mark>という。 <mark>「兕馬觚」は兕馬の形をした觚、即ち「兕觥」そのもの。</mark>



『詩経』かの高岡に陟れば、わが馬玄黄(病気)、われ、しばらくかの兕觥を酌み、これ以って永く傷まざらん(心を慰めよう)。

「司母辛」 児觥 (しぼしんじこう) 「司母辛」 青銅製 殷時代後期 高36cm 長46.5cm 1976年河南省 安陽市殷墟5号墓出土 中国社会科学院考古研究所蔵

幅の広い注口,扁平で長い体,四足,牛頭の取っ手.注口の先端に小さな孔がある.前肢は馬の足に似て,外側に龍文を飾る。蓋の裏の後部に「司母辛」の銘がある。



鳳鳥紋兕觥:周代早期 丹 徒烟墩山出土(出典:中 国経済ネットワーク)

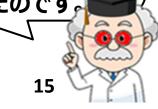


「泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚」は、周王朝の「爵制」に習った「觚の名称」による「周風官名」だった

「泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚」は、周代の青銅器「觚」の種類の様々な名称であり、歴代の倭王は、古来より周王朝の青銅器の爵にちなむ「爵制」に習い、恩賞や身分、位階を示すのに「觚の名称」による「周風の漢字官名」を用いていたと考えられる。

『倭人伝』で発音に漢字を当てた官名の中で、この官名群だけが訳の分からない、全く異質な漢字が当てられているのは、『倭人伝』の時代より遥かに古く、倭人が朝貢した周代に由来する名称を伝えたものだったから。

『倭人伝』の「泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚」の三つの官名は、周代に九州の倭人が周王朝と 交流したことを示していた。そして俾弥呼は漢字を用いて官名を表記していたことになる。 一見意味不明の邪 馬壹国時代の漢字 表記の官名は、倭 人の周代以来の交 流の歴史の産物 だったのです。



俾弥呼は周代以来の伝統の中で漢字を用いて官名を記していた

何故この「泄謨觚・柄渠觚・兕馬觚」という官名が倭国に残ったのか

『三国志』東東伝序文「夷狄の邦と雖ども、俎豆 (そとう) の象 (かたち) 存り。中国、礼を失うとも、これを四夷に求むるに、猶信ずるものあり」。「俎」は神に奉げる生贄を調理する「まな板」、「豆」は供物を盛る高坏。従って、「俎豆の象」とは、天子が天地の神を祀る祭祀・儀礼を言う。陳寿は周代の儀礼が「東夷の倭人に残っていた」とする。⇒爵・觚の儀礼に由来する「官名」も残った。





現代日本にも残る「周代以来の儀礼」



















俾弥呼の任命する官名は「文書に記されていた」

陳寿は倭人の発音は聞けない。魏使が聞けたとしても「わざわざ難解な漢字を当てる」とは考え難い。 従って<mark>泄謨觚(セもこ)・柄渠觚(ヘきょこ)・兕馬觚(じまこ)と、その他『倭人伝』に記す「魏に遣わされた」大夫難</mark> 升米(ਖ਼んしょうまい)・都市牛利(っしぐり)、大夫伊声耆(いしょうぎ)・掖邪狗(ゃくゃく)等は、「俾弥呼の外交文書に漢字で 記された官名や人名」だったことになる。* 俾弥呼当時の人名の読みは「日本呉音」で表記。

紀元前に遡る硯の発見は、俾弥呼の時代以前から倭国では「漢字」が使用され、邪馬壹国時代の官名の「泄謨觚 (ਖಕਟ)・柄渠觚 (ハきょこ)・兕馬觚 (じまこ) 」は、倭人が朝貢した「周代の青銅器の漢字名称」を俾弥呼が使ていたことを示している。